

1. 「積雪期単独北海道分水嶺縦断 ―宗谷岬から襟裳岬 670 km 63 日間の報告―

山岳ガイド、北海道大学ワンダーフォーゲル部 OB 野村良太

【契機】

「完全単独ワンシーズンであれば、極地の単独歩行横断に匹敵する、最も困難で素晴らしい記録になることは間違いない。」 17 年もの歳月を費やしてこの計画を完遂し、その記録を『北の分水嶺を歩く』にまとめた著者、工藤英一氏があとがきに残したこの言葉が頭を離れない。工藤氏はその後こう綴っていた。「いつの日か誰かに、人並はずれた艱難辛苦に耐える精神力と強靱な体力の持ち主に、挑戦し実現してもらいたい。(中略)道内のこれからの若き岳人に期待している…」

ぼんやりと、この“若き岳人”というのが僕のことにならないかな……。と思う。3 年前の 2019 年、とある一冊の本がきっかけで、このルートはまだ誰も一つなぎには歩いていないことを知る。そうか、ならばこの足で…。

【計画概要】

- ・北海道を南北に連なる稜線を一つなぎに
- ・最北端の宗谷岬から南端の襟裳岬まで ・総距離 670 km の間に街は無い
- ・いくつかの峠を除けばひたすらに山岳地帯が続いている

【講演内容】

- ・計画に至る経緯 ・具体的な計画内容とその考察
- ・苦難と幸福に満ちた縦走期間を写真や動画で振り返る
- ・63 日間の過ごし方 ・これからのこと

2. 「中国南西部に花を追う ―四川省・雲南省での青いケシ探索―

青いケシ研究会、JAC アルパインフォトクラブ、横断山脈研究会 松永秀和

5 年前の 2017 年 12 月、第 43 回雲南懇話会において「モンスーン・ヒマラヤに花を求めて」と題して、ヒマラヤ山脈の南部に咲く青いケシ（メコノプシス属）を紹介した。しかし、青いケシはヒマラヤが隆起する以前からこの地に咲いていたもので、隆起により南北に分断されたものの、ヒマラヤ北部においても独自の進化を続けてきた。このため、約 90 種あると言われる青いケシ属の半数はヒマラヤの北や東、チベット高原や横断山脈やその周辺高地に生育している。モンスーンの影響で雨量の多いヒマラヤ南麓に比べて、やや小型ではあるものの、多彩さにおいては引けを取っていない。

2013 年 6 月、四川省南西部の螺髻山（ろうじさん）で初めて実物の青いケシを見て以来、コロナによるロックダウンで入国できなくなった 2019 年までの間、6 回中国で青いケシを探索した。ネパールやブータンのように洪水やヤマビルの危険はないものの、チベット人の多い地域では公安の厳しいチェックに悩まされた。

今回は四川省や雲南省で見た青いケシを中心に紹介する。また、キングドン・ワードをはじめとする青いケシに魅入られたプラントハンターたちと彼らの足跡もあわせて、紹介したい。

3. 「雲海の村と棚田 ―中国雲南省紅河州金平県者米谷の生活世界―」

国立歴史民俗博物館名誉教授、滋賀県立琵琶湖博物館名誉館長 篠原 徹

中国雲南省とヴェトナムとの国境には峩々たる山岳が東西に櫛比していて中国側の谷筋には壮烈な棚田が展開している。谷筋の棚田の奥は中国では珍しい原生林の亜熱帯林が残っていてトラやテナガザルが棲息している地域である。この地域のひとつ金平県者米谷ではタイ族・ヤオ族・ハニ族・アールー族など8つの民族が山の斜面を垂直的に「棲み分け」（今西錦司）て生活している。この者米谷に2003年から2007年の約5年間、科研費「実践としてのエスノ・サイエンスと環境利用の持続性―中国における焼畑農耕の現在―」というテーマで調査してきた。この地域は当時外国人のよる調査許可はおりなかったところであり、外国人としては私たちが初めての調査であった。

谷筋のもっとも下、つまり川の両岸にはタイ族が住んでいて、棚田を中心に生活世界が展開している。その上にはヤオ族が住んでいるが、ここでは若干の疎林が残っていて、棚田と野生植物採集および奥地の原生林内での草果栽培（アグロ・フォリストリー）が盛んであった。谷の一番上部にはアールー族が住んでいて、かつては焼畑と狩猟採集を主とした生活をしていたが、現在では我々が斜面畑と名付けた畑作を主とする生業を営んでいる。私たちの調査は生活や生業の生態人類学的調査によって、環境資源と生業多様性との関係を明らかにすることを目的としていた。この講演ではそのうち、棚田の多様性や水田雑草利用と灌漑のありようとの関係に焦点をあてて話をしてみたい。

4. 「2050 年 CN に向けた再生可能エネルギーの利用 ―風力発電随想～日本の洋上風力発電の未通し―」

（一社）ディレクトフォース（環境部会）、ジャパン石油開発（株）OB 中西 聡

2050 年カーボンニュートラルの達成には、再エネ発電の大幅拡大が必要である。日本の太陽光発電導入量は世界3位だが、風力発電の導入は世界に大きく遅れ、洋上風力の導入は現在ゼロである。一方、ドイツ、デンマーク、英国などは20年前から洋上風力発電を開始した。初期の発電コストは高かったが、導入が進むに連れ洋上風力発電所建設コストが低下し、今や、発電コストは天然ガス火力発電と同等にまで低下している。

日本の洋上風力発電は漁業協同組合の反対などで遅れていたが、2019 年、洋上風力発電事業のルールを定めた再エネ海域利用法が施行され、洋上風力促進区域に指定された秋田県と千葉県の3区域で事業者の競争入札が実施された。3区域合わせた発電規模は約170万KWで、100万KWの原発1.7基分に相当する。（風が弱い時、発電量は低下するので、年間の実発電量は安定して発電できる原発の0.7基分程度）

この入札には外国の発電事業者も含め多数の事業者が参加した。日本では未経験の洋上風力発電事業であり落札価格は20円/kWh台と想定されていたが、3区域全部を三菱商事グループが落札し、発電規模が820MWと一番大きい区域での落札価格は12円/kWhであった。この価格は他の入札者にとっては想定外の低価格で「価格破壊」と非難されたが、日本でも洋上風力発電が価格競争力のある電源として発展するエポック・メイキングとなった。しかし、日本で洋上風力発電が発展するためには多くの課題がある。それについて一緒に考えてみたい。